

1 就職活動の意思決定はなぜ難しいか

初職の意思決定と入社後ミスマッチの関係とは？

意思決定を意識する

我々人間は1日に最大で3万5000回の決断をしているそうだ※1。これだけ多くの選択の意思決定をしていることを意識しているだろうか。朝起きる時間、友人とのランチの店など思いつくものもあるが、この数字を見ると、ほとんどの選択が無意識的になされていることに気づくはずだ。普段無意識的に行う日常の選択の一方で、進路選択について、「意識的になる」ことが本章の目的となる※2。就職活動の意思決定・進路選択は、日常や高校生時の大学選択との違いを認識することが重要だからだ(表①)。

日常の決定や大学を決めることとの違い

例えば、高校生の大学への進路決定は偏差値や共通テストの点数によって、一定の精度で入学の可否の予測がつく。一方、企業・団体等に採用されるためには大学の偏差値や

テストの成績だけでは予測が難しい。(表①)

また、選択の条件や基準は、例えば日常でパソコンを購入する場合、価格や性能など単純で明確なものがある一方、就職時は個人の価値観に関連し、より多様である(図②)。結果の評価は、パソコンを購入後しばしば使用して「使いやすい」や「お買い得だった」と短期的に単純評価できるのに対し、初職の選択の場合は、入社前、入社後すぐ、社会人になってから3年後など、長期にわたって評価がなされる。

このように、初職の意思決定と大学や日常の意思決定との違いを考えることは、安易な決定を避け、取り組むべきことを正確に捉える意味で重要であると考えられる。

一方で、図②のように、選択のプロセス自体は日常も就職活動も同じである。日常の意思決定プロセスを分解し、ステップごとに就職活動の選択に当てはめることで、自身が気づいてはいなかったが、その時々で本来必要な情報とは何かを知ることができる(P15参照)。

※1 ケンブリッジ大学 バーバラ・サハキアン『How decision making goes wrong, and the ethics of smart drugs』
 ※2 P15の横山氏の取材記事参考

1 日常の選択と進路決定の違い

選択の種類 特徴	日常の 選択の場合	就職活動の 進路決定の 場合
選択の目標	目標立案への関心度は決定する問題によって異なる	目標立案のために関心度はかなり重要
選択肢	比較的明確でわかりやすい	様々な情報が必要であり、複雑
選択の条件や基準	かなり単純で明確	各自の価値観と関連し、明確にするのが難しい場合もある
実現可能性の評価	予測はある程度できる	社会経済状況などコントロールできない要因もあり難しい
望みしさの評価	主観的だが、社会的に望みしさが決まっていることが多い	主観的であり、自分の価値観と関連していることが多い
結果の評価	短期的なものが多く評価は比較的単純	長期的に評価が行われる
結果の影響	影響範囲が比較的小さい	長期的に影響がある

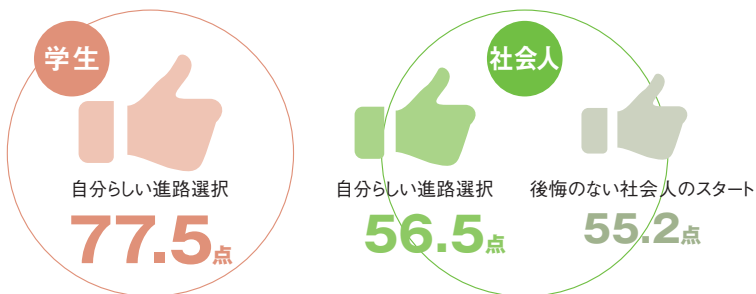
横山明子「大学生の進路選択・決定過程に関する研究」(2009)を基に作成

2 日常の意思決定のプロセス

- STEP 1** 決定の目標を定め、決定の計画を立案する。
例：いつ・どこで・何のためにパソコンを使うのか？
- STEP 2** 様々な情報を収集する。
例：インターネットや店舗でパソコンについて調べる。
- STEP 3** 選択肢の候補を考える。
例：候補となるパソコンを複数選ぶ。
- STEP 4** 選択の条件や基準を考える。
例：価格、性能(CPU…)、重さ、デザインetc.
- STEP 5** 選択条件と基準によって各選択肢の望みしさを評価する。
例：選択の可能性を数値化する。
- STEP 6** 選択ルールによって選択肢の候補を絞る。
例：パソコンを選ぶ
- STEP 7** 選択の結果について評価をする。
例：実際に使用して評価をする。

横山明子「大学生の進路選択・決定過程に関する研究」(2009)を基に作成

3 自分らしい進路選択の振り返り点数(100点中)



※学生全体・社会人1-3年目/数値回答



入社後ミスマッチの実態

初職の選択の結果について現状・実態に目を向けてみよう。まず学生に対し就職活動終了の理由を聞いたところ、「内定を取得した企業に入社したいから」(89.0%)の次に「できるだけ早く内定を取得し、就職活動をやめたかったから」(30.5%)と、進路選択の意思決定に消極的とも取れる理由が約3割見られた(グラフ④)。次に、初職の意思決定をした3年目までの若手社会人を対象に「どれくらい就職活動終了時に『自分らしい進路選択』ができたか」を聞いたところ、平均が56.5点(100点中)となった(P8図③)。同設問で学生は77.5点であり、入社前後で意思決定への自己評価が大きく下がることが分かる。また、同様に「社会人生活にあたり、どのくらい後悔なく『社会の一步目』を踏み出せたか」は平均55.2点との回答だった(P8図③)。

人によっては、事前に後悔の解消方法を模索することに

意義を感じないかもしれない。ただし実際、初職の進路選択に対して後悔が大きい場合、それは早期離職につながる。早期離職は転職時に業界・企業ともに選択の範囲が狭まる傾向にあり、前職よりも有利な労働条件で働ける可能性が低くなる(初見,2017)と指摘されている。

労働政策研究・研修機構(JILPT)が行った調査では、『給与』や『労働時間』、『仕事内容』などの情報において、採用前の情報と入社後3か月の現実の内容が一致しなかった若者は、3年以内の離職率が高い」と結論付けている※3。2023年卒学生について見ても、(グラフ⑤)労働条件や具体的な仕事内容について、企業と学生の情報提供・取得意識には、ギャップが見られた。就職活動時の不十分なコミュニケーションが後悔をより多く生みだす。もし後悔があったとしてもそれを受け入れ(乗り越え)、自分らしく生き生きと人生を過ごせることが望ましく、そのための初職の選択を考えていきたい。

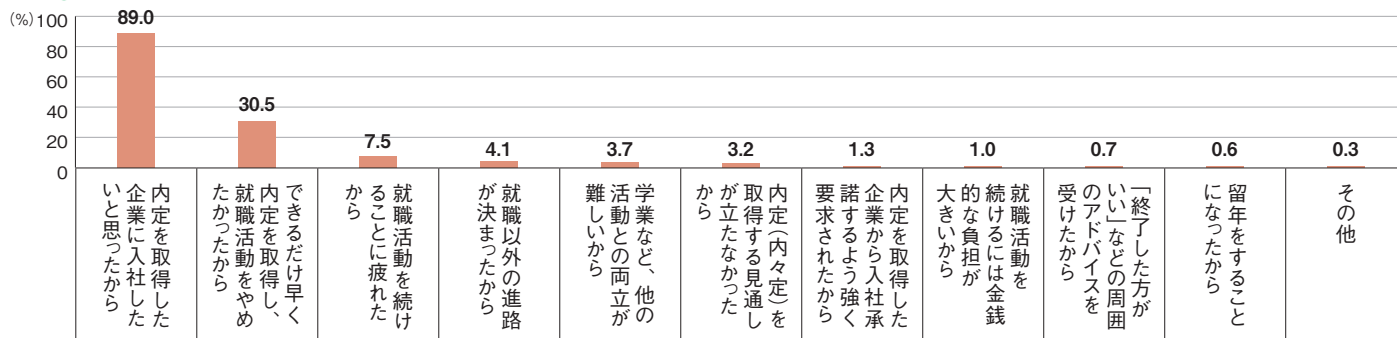
※3 労働政策研究・研修機構(JILPT)「第2回若年者の能力開発と職場への定着に関する調査」

学生

「早く内定を取得して就職活動をやめたい」という理由で活動終了が約3割

④ 就職活動を終了した理由

※就職活動終了者/複数回答



学生

企業の情報提供意識と、学生が知ることができた情報には大きなギャップがある

⑤ 企業の情報提供と学生の情報取得状況

※就職活動で知りたいと思っていたもの/知ることができたものの差が大きい上位10項目(学生全体/複数回答) 2023年卒採用実施企業/複数回答

